写真：後藤　文：千葉

第３日目　剱岳北方稜線　Ｎｏ．１６０７
９月７日（日）　雨・曇り・薄曇り時々晴れ・曇り
起床２：５０ー池ノ平小屋出発４：０７ー小窓雪渓５：１９ー小窓６：０３ー小窓ノ王８：４５ー三ノ窓９：３０ー池ノ谷乗越１０：２８ー剱岳１２：４２～１３：０４ー前剱１４：１９ーー服剱１５：０８ー剱沢野営場着１６：２４
標高差　上り　池ノ平小屋２０５０ｍ～剱岳２９９９ｍ＝約９４９ｍ（上り下り激しい）
　　下り　剣岳２９９９ｍ～剱沢テント場２１５０ｍ＝約８４９ｍ（上り下り激しい）

昨晩20時過ぎまで騒いでいた登山客は21時頃に真上の寝床に入り、けたたましいイビキをかき続ける。耐えかねて耳穴に小指を突っ込むけれども腕の体勢が苦しい。誰かの時計が毎時ピピッと鳴ることに気付いて21、22、23時を数え、24時を迎えると起床まで3時間を切った、もう寝るのは諦めよう。この頃に寝入ったのだろうか25時の時報は覚えていない。

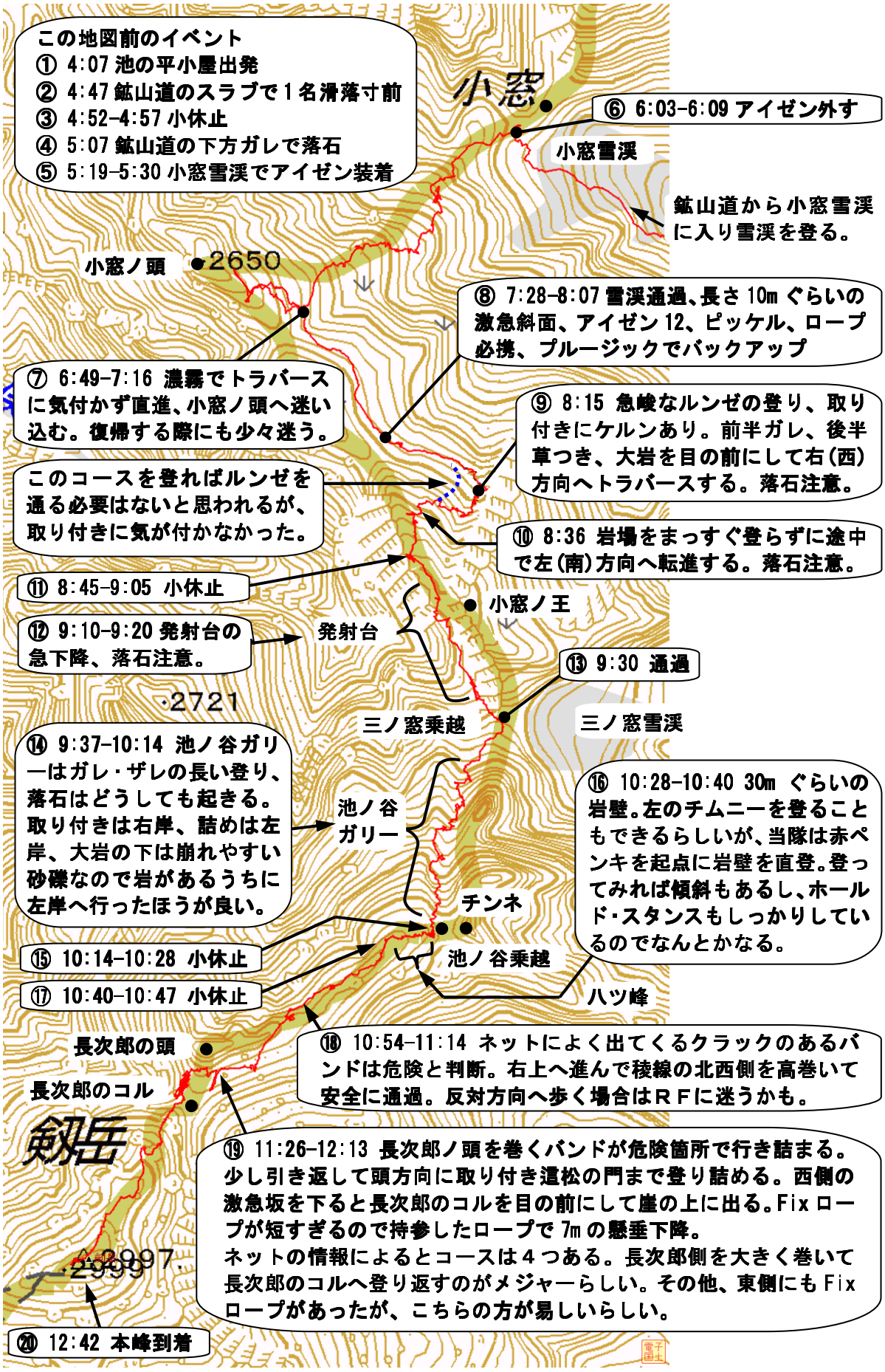
2:50のアラームで起床すると昨夜21時頃に降りだした雨はまだ続いている。各自出発準備にとりかかるものの決行か否かは定かでない。G藤SLが呟くように尋ねる「みんな予備日はねぇよな･･･」、しかし皆の答えは　曖昧だ。登山靴を履き始める頃に　G藤SLがS藤CLに訊く「どうすんの？行くの？」、回答は聞き取りにくかったがG藤SLが念を押すように言った「行くのね」、この言葉が決行の合図である。二日前まで「雨ならやめた方がいい」と警告していたG藤SLは何も意見しなかった。自分は大いに心配だった、それは雨のせいだけではない、本当に不安だったのは自分自身の力量と、寝不足の体だった。

池ノ平小屋で出発準備

ヤッケ・ザックカバー・ヘルメット・ヘッデン・ピッケル装備で小屋前に集合、G藤SLが注意事項を述べる。鉱山道に敷設されている補助ロープは支点間隔が長すぎて複数人が掴むと引っ張られたときに巻き込まれる。支点ごとに距離をおいて一人ずつ通過するよう指導があった。役割分担は先鋒G藤SL、しんがりはT葉、この二名が無線を携帯する。

いよいよ出発

剱岳北方稜線南下概要（2014 年 9 月 7 日 小窓⇒本峰）　　ＧＰＳ：千葉



【池の平小屋→小窓雪渓、危険な鉱山道を行く】
① 4:07 池ノ平小屋出発、ガスで視界は 100m ぐらいか、旧鉱山道であったという登山道の踏み後は明瞭だが、両側からブッシュに覆われて足元が見えにくい、故にピッケルで草を掻き分けながら進む。左側（南側）の谷は低木と草に覆われ夜明け前の暗さも手伝って危険そうには見えない。だが昨日向かいの山から見たこのコースは急斜面をトラバースしており、足を踏み外せばただでは済まないことを肝に銘じなければならない。M 上賀さんの歩行ペースに併せ S 藤 CL と自分の 3 人は少し遅れていたが、足元のすべり具合を確かめながら慎重に前進していた自分はさらに数 m 遅れている。それに比べて前を行く 5 人はムカデのようにピッタリ間を置かずに進んでいくのが不思議だった。緩い登り坂、健脚の 4 人にとっては G 藤 SL のペースが遅かったかもしれない、だが先鋒は足元に細心の注意を払わなければならないので普通の登山道よりゆっくり進まざるをえないだろう。

鉱山道の最高点を通過して下りにさしかかると岩が多くなる、いやな予感がした。我々3 人が小さな谷筋に廻り込んで先を行く 5 人の隊員が山腹に隠れ全く見えなくなったとき、② 7:47 頃、突如ただならぬ悲鳴とG藤SLの怒鳴り声が聞こえた、やってしまったか・・・一瞬そう思うほどの緊張感が伝わってきた。こちらは冷静にしなければならないと思っていたが M 上賀さんと S 藤 CL が「どうした！大丈夫か！」と言いながら小走りで進み出したのを見て思わず「走らないでください！」と言いたかったが、大声をだせば場の緊張感が高まるので声を押し殺した。二次災害を起こしては大変と思い自分は足元を確認しながら進む。自分が現場に到着したころアクシデントは解決していたので何か起こったのか詳細は分らない。現場は谷側へ傾いた長さ 5m 横 3m ぐらいの一枚スラブ、雨に濡れた表面が滑りやすい。山側が草つきになっていてこれもまた滑りやすい。細いトラロープの支点間隔は出発前の忠告どおり長すぎる。その後 ③ 4:52 頃の小休止でアクシデントの詳細を問うのは控えた。

さらに進むと ④ 5:07 頃にガレを横断する。G 藤 SL がガレを数 m 下ったところで M 井さんが上方向に赤ペンキを発見、G 藤 SL はガレを登り返した。直後「ガラガラ」っと鈍い音をたてて 80cm ぐらいの大岩が数 m ぐらい崩れ落ちると岩同士が衝突して火花が飛び散り暗闇の中に閃光が走る。

【小窓雪渓→小窓、雪渓を登る】
⑤ 5:19 小窓雪渓に降り立ちアイゼンを準備する。辺りはだいぶ明るくなってきた。自分が「あー暑い」と言っても誰も相槌を打たない、皆は暑くないのだろうか・・・。濃霧下で逆方向から来た場合この鉱山道の取り付きはわかりにくいだろう。その場合、左岸寄りに歩くべきだろうと思った。皆さん手際良くアイゼンを装着して再び歩き始める。前半はそれほど急ではなく歩きやすいが徐々に斜度がきつくなってくる。

小窓雪渓を登る

時折隊列を崩しながら、でもオーダーは保ちながら登った。雪渓の上りはたった30分強でそれほど長いものではなかった。雪渓が切れて尾根まで残り30mぐらいの草つき、安全な足場を確保できるまでアイゼン装着のまま上り詰める。⑥ 6:03 小窓乗越に辿り着いてアイゼンやヘッドランプを外す。このあとの雪渓横断でアイゼンを使うので本来仕舞い込む必要はないのだがザックカバーをしているので外にぶら下げるわけにもいかない。

小窓乗越

小窓雪渓は日本では数少ない氷河とのこと、尾根から望む雪渓はガスに巻かれて遠く下方は見えなかった。

【小窓→小窓の王、雪渓横断とルンゼの登り】

相変わらずガスが濃い中、判りやすいトレースを標高差200m程登る。⑦ 6:49それまで明瞭だった道がいつの間にか草つきの登りになり登山道らしくない。いやな予感がしたので GPS で確認するとコースを外して反対方向の小窓ノ頭へ向っている。この旨を G 藤 SL に伝えたあと先行隊は尾根で行き詰まってしまった。現在位置の打ち合わせをして引き返すことが最善策と判断、戻る途中にも少し迷って GPS を頼った。間違える登山者が多いのか道は頭へ続いているように見え、正規ルートのトラバースは判りにくい、濃霧時は要注意である。

そこから程なくして ⑧ 7:28 雪渓横断地点に到達。S 藤 CL がロープを岩にセットし G 藤 SL が対岸へ渡ってロープを固定、ロープに引きずられて小落石が起きそうだったので握りこぶし大の石をロープのラインから除去する。各隊員はアイゼンを装着、プルージックでバックアップを取って対岸へ渡る。自分はプルージックを実習していなかったので M 井さんにその場で教えていただいた。1名のプルージックが利いていないことに G 藤 SL が気付き、渡る前に効きめをしっかりチェックするよう注意喚起した。そうしているうちに単独登山者 2 名が追いついてきたが、我々が渡り終えるまで待っていてくれた。全員無事渡り終えるのに 40 分ぐらいかかった。

雪渓を渡る

岩場のトラバースを前進する。⑨ 8:15頃急峻なルンゼに到達、取り付きにケルンがあるので道は間違っていないはずだ。ガレているので落石を起こさぬよう注意して進み、難しそうな岩場の手前で右(西)方向へトラバース、ここからは草付きが滑って歩きにくい。尾根に出ると踏み跡が尾根筋に走っていた。ここを通れば歩きにくいルンゼを登る必要はなかったのかもしれないが、トラバースの途中にあったであろう取り付きには誰一人として気付かなかった。尾根を登り岩場に取り付いてそのまま真っ直ぐ進むと行き詰るので、手前の岩場を南(左)方向へ転進する。マジでここを登るの？と思いながら岩場を登ると赤ペンキを発見してほっとする。落石が起こりそうな足場なので下方に注意を向けると先ほどの単独男性が真下にいる、少し引き返してもらって安全を確保した。岩場を登り詰めブッシュの間を通り抜ければ小窓ノ王の肩に⑪ 8:45 到着、小休止をとる。目の前に聳える小窓ノ王の威圧感が凄い。いつのまにかガスが薄くなり、そのうち青空がチラリと見えるようになった。雨はもう降らないだろう、皆ヤッケを脱ぐ。単独の二名はここで追い抜いていった。

急峻なルンゼの登り

小窓ノ王の肩で小休止

【小窓の王→三ノ窓、発射台の下降】

⑫ 9:10 発射台のガレを下降する、ここも前を行くメンバーに落石しないように細心の注意を払う。ロープが敷設されている場所もあったが古すぎて頼る気にはなれない。⑬ 9:30 三ノ窓に到着。池ノ谷側を望むと谷筋にある急峻な雪渓を横断している登山者がいる。迷ってしまったのだろうか？

発射台を下るメンバー

【三ノ窓→池ノ谷乗越、池ノ谷ガリーの登り】
⑭ 9:37 いよいよ悪路で有名な池ノ谷ガリーの右岸に取り付いた。ガレとザレがミックスした急斜面は噂通り、落石を起こさないように歩くのは難しい。上からの落石に注意を払いつつ自らが起こした落石はしっかり下方へ注意喚起する。途中G藤SLは左岸に渡ったが後続はそのまま右岸を登ってしまった。大岩の手前で左岸に渡ろうとするがガリー中央部のサラサラの砂礫が崩れやすい。慎重に渡ったつもりだったが足元の砂が走り出すとそれにつられてガラガラと岩なだれが起きた、もっと下方で左岸に渡るべきだったろう。40 分かけてガリーを登りきり ⑮ 10:14 三ノ窓乗越に到着、男性登山者2名は当隊が登りきるまで待機してくれていた。ここで小休止をとる。

池ノ谷ガリーを登るメンバー

正面の岩峰が小窓ノ王
小窓ノ王左側の急斜面が発射台
手前は池ノ谷ガリー

【池ノ谷乗越→長次郎のコル、30m 岩壁登攀、懸垂下降】
池ノ谷乗越の西に聳える 30m ぐらいの岩壁、まさかこれを登るんじゃないだろうな・・・と思っていたらやはり正解、だって他にルートが見当たらない。まるで垂直に見える岩壁を見ているとこれまでの難所などたいしたことないような気がした。左のチムニーを登ることもできるらしいが当隊は赤ペンキを目印に ⑯ 10:28 正面岩壁に取り付く。登ってみればホールド・スタンスは十分、垂直に見えた壁も実際には傾斜があって案外あっさりと登り詰めることができた。⑰ 10:40 岩壁を越えた先の広場で小休止、ガスの切れ間に見える八ッ峰が素晴らしい。レインパンツを脱ぐのに手こずったので隊には先に出発してもらった。

30m の岩壁を登りきったところ
バックは八ッ峰

5 分ぐらい遅れて歩き出すと大岩を目の前にして左右どちらへ進めばよいのかさっぱり分からない。無線で聞いてみても埒があかなかったので真ん中あたりを登ってみると間違いではなさそうだ、というよりどこを進んでも良いのだか全てアスレチックといった具合だ。

⑱ 10:54 隊はクラックの入ったバンドを前にルーファイしていた。ここはネットでよく登場する場所、捨て縄がぶら下がっているが簡単に通過できるようには見えない。S 藤 CL は高巻きを偵察したあと小ルンゼを下ってこんどはこのバンドに挑戦する。身体を横にしながら見事なムーブでクラックをクリア、しかし荷物の重い自分が真似できるとはとても思えなかった。G 藤 SL が高巻いたほうが良いと判断、出だしは進めそうに見えない岩場だが行ってみれば安全に通過できた。ネットの情報より安全なルートを見つけることもある、こういったところがバリルートでルーファイの楽しいところだろう。

ネットで有名なバンドに挑戦する S 藤 CL

クラックの入ったバンドを通らずに高巻いた

⑲ 11:26 さあこれで難所も終わりだろうと思っていたところ、隊は長次郎ノ頭の付け根を巻くバンドで行き詰まる。すこし戻って長次郎ノ頭方向を見上げると踏跡らしきものが見えるので登ってみた。中腹で G 藤 SL が南方向ではないかと指摘したが GPS ログは真上を示している。

懸垂下降の準備

途中で S 木さんに先を譲り、這い松ゲートの向こう側を覗きこんでもらったが、とても道があるようには見えないという。這いあがって覗き込むと自分には踏み跡があるように見えた。そのまま急斜面を降りていくと長次郎のコルを目の前にして崖の上に出てしまった。Fixロープが垂れ下がっている、崖を覗きこむとロープは中段までしか届いていない、良く見るとホールド・スタンスはありそうなので Fix ロープに頼らず降りてみることにした。

上で待機する隊員は他のルートを模索していたようだったが、二番手で降りてきたＳ藤CLが「向こう側にもFixロープがあるけど、どっちだって同じだよ、懸垂だ」と声をかけた。自分は中段まで降りたところで次の足場を探していた。「あんまり突っ込むなよ！」とＧ藤 SL から注意を受けた頃、右側にシフトすればホールド・スタンスがあることに気付いて崖下まで降り立つ。次に M 井さんが Fix ロープを使って中段まで降りたので、自分はロープを担いで中段まで登り返し M 井さんにザイルを手渡した。M 井さんがザイルを Fix ロープにくくり付けて引き揚げてもらった。その後、皆さん順番に懸垂下降。S 木さんはフリーで降りてきた。

懸垂下降する M 上恵さん

帰宅後、ネットで長次郎越えについて調べたところ、概ね4コースあるらしいことが分かった。

(A) 長次郎谷側の下方を大きく巻いて長次郎のコルへ登り返すコース。
当隊がバンドで引き返した後、登りではなく下りルートを探せばよかったのかもしれない。
ネットでは落石やザレ場を気にして、ここを止めて(B)のコースをとっている記録もある。
メインルートのはずなのにネットでGPSデータが見つからない。

(B) 当隊が懸垂した隣のFIXロープ、やや東側にあった崖のコース。
ガイドツアーでも使っているようで、当隊が使った③より容易らしい。たぶん我々が長次郎の頭へ登る途中、G 藤 SL が「こっちじゃないか」と指摘された場所に合流すると推測する。

(C) 当隊が懸垂下降した長次郎の頭コース。
難易度高めだが使っている人はいる、あの崖は「しょっぱい下り」だそうだ。

(D) バンドを使うコース。
当隊が引き返したバンドと懸垂下降点から東へ巻いていたバンドがたぶん繋がるコース。
ネットのコメントによれば強引なコースらしい。G 藤 SL によれば逆方向に進む場合は良さそうとのことだった。

【長次郎のコル→剱岳本峰、頂上へむけて最後の岩峰を登る】

長次郎のコルから本峰方向を望むとまたも大きな山が聳え立っている。本当に登れるのだろうかという容姿だがＧ藤 SL は躊躇なく前進する。途中の九十九折、各段の岩棚が肩よりも高く、しかも 2m 近い岩がハングして上を行く隊員がまったく見えない場所で「ラク！」の叫び。岩棚と大岩が邪魔になって落石が全く見えない。一瞬大岩の下へしゃがみ込もうと思ったが落ちてくる岩が頭に直撃するかもしれない、そう思って前方にいたＳ藤 CL のもとへ駆け出した。その途端 B5 版くらいの岩が岩棚から飛び出して目の前、胸の高さ通過していった。しゃがみこんでコメカミにでも直撃していたらそのまま崖下へ飛ばされていたかもしれない。自ら落石の方へ向かってしまった格好だが、落下コースが見えないのだから仕方ない、本当に恐怖だった。落石ポイントを確認するとそれほど岩を引っ掛けやすいような場所ではない、かえってこういう然もない場所の方が集中力を切らして落石を起こしやすいのかもしれない。

ここを越えると本峰が見える

本峰が見えてきた

⑫ 12:42 ついに剱岳本峰到着。頂上ではＧ藤SLがメンバーの一人ひとりと順に握手を交わす。「Ｇ藤さんのおかげで頂上に立つことができました！」 自分もがっちりと握らせてもらった。

再びガスってしまい頂上からの景色はお預け、でも生憎の天気という言葉は場に合っていない、達成感で心は晴れ晴れとしている。

Ｇ藤 SL、Ｓ藤 CL をはじめ、あさぎりの会の皆様、楽しい四日間どうもありがとうございました。

○ 一般道である剱岳→剱沢野営場の詳細についは割愛するが言うまでもなく難所。
難度の高い鎖場や、平蔵ノ頭・前剱・一服剱・剱沢野営場への 4 回の登り返しがキツイ。
○ 長次郎ノ頭を越える際、突っ込みすぎて崖をフリーで下ってしまった。
ザイルがあるのだから積極的に使って安全策をとる場面だった。大変反省しています。
○ 初めての北アルプス山行がこの北方稜線だった。
○ 行動時間は 12 時間を超えた。
○ 計算すると 2L の水分を含めてザックは 18kg ぐらいあったことになる、ホントか？
○ イワヒバリとホシガラスを見たが雷鳥には会えなかった。
○ はじめてデジカメ持ってくるのを忘れた。
○ あさぎりの女性達は次週、白峰三山を縦走するらしい、元気ですね。
○ いろいろあったが全員が怪我もなく無事に帰ってこられて本当に良かった。
○ 山行時はもう二度と行くことはないだろうと思っていたが、こうしてレポートを書いていると
もう一度行ってみたいと思ってしまう。

Ｔ葉

その他の記述（ＳＬ後藤）

１．１５年振りの北方稜線だったが、岩場のルートは正確に覚えていなかった。
２．鉱山道は危険といわれているが、正にその通り。Ｋ林の滑落は一瞬だった。頭と荷物が重いので、フィックスを掴み体は完全に逆転状態で足が踏ん張れない。落ちれば小窓雪渓のシェルンドに挟まってしまう。素早く近寄って、ザックの掴み持ち上げた。
滑落の原因は正確に分からない。フィックスが緩んで弾かれたかもしれない。いずれにしても非常に危なかった。トラバースで支点が少ないフィックスは要注意である。
３．小窓雪渓を上り稜線に出たが、霧が深くてルート選定が難しかった。
４．前回、長次郎のコル出るにザイルは使わなかった。様々なルートがあるようだが、今回のルートは、上りはイイが下りはやや難しい。あそこをＳ木がノーザイルで下ったのには驚いた。一歩間違えれば即死である。
５．このような場合、ＧＰＳは万全ではない。何故ならＧＰＳのルートは過去の記録を入れてある。経験がない者は、果たしてその記録がベストであるかどうかは不明である。ＧＰＳはあくまで「参考」と考えるべきである。
６．剣岳はある意味因縁の山だ。１９８９年５月４日１２時２０分、Ｍ 労山春山合宿で早月尾根を上り、剣沢に向かっていたＹ君（３４歳）は、前剣を下降時、東大谷（ひがしおおたん）に滑落墜死した。メンバーは６名。平均年齢は４０歳。Ｙ 君は２番目に若く雪山の経験は浅かった。
早月尾根は、その年の冬山合宿に向けての偵察・訓練登山だった。５月初めの前剣は嫌らしい。ベッタリ雪が付いた雪壁になる。荷物が多い場合、出だしは後ろ向きで降りる。
Ｙ 君は雪壁に入る直前に滑落した。下から目撃したが、一瞬の出来事だった。今から２５年前。当時のメンバーも２名亡くなり、登山を続けているのは私だけになった。先日、遭難地点に立ち手を合わせた。他のメンバーは、そのことを知る由もなかった。
前回、北方稜線に行ったのは、１９９９年８月だった。 山行時、義父が入院中だった。

ただ、危篤性はなく当分大丈夫で出かけた。ところが阿曽原温泉小屋で家に電話したら、亡くなったの報。しかし、私はリーダーで参加していた。ここで、帰る訳に行かなかった。苦しい山だったが、何とか頂上に立った。その時、滂沱と涙が溢れた。
メンバーは怪訝だったが、初めて事情を説明した。親不孝な息子だった。道楽をこいていれば、親の死に目に会えない典型的な例だった。今回は頂上でオヤジに、そのことの許しを請うて来ました。

７．剣からの下りは長かった。ただ、ゆっくりだったので何とか凌げた。膝は相変わらずだった。結局、この日の行動は１２時間を回っていた。長い長い１日だった。

（敬称略）